

今月、アメリカ新大統領にバイデン氏が就任しました。ニュースで就任演説の一部を聞いた人も多いのではないでしょうか。就任演説にはその時代の状況が反映されます。そこで、今回は、歴代のアメリカ大統領の就任演説の一部をみていきたいと思います。

1. 第32代 フランクリン・ルーズベルト

ルーズベルト▲

「我々が恐れなければならないのは、恐れそのものだけだ。」（1933年）

これは大恐慌の中で米国に対して前進を訴えた言葉で、20世紀を代表する就任演説と言われています。ルーズベルトはその後国民に直接呼び掛ける「炉辺談話」を開始し、多くの米国民がそれに耳を傾けました。またルーズベルトは史上唯一四期大統領を務めました。

2. 第35代 ジョン・Fケネディ

ケネディ▲

「あなたが国のために何ができるかを問うてほしい。」（1961年）

ニューフロンティア精神を掲げて43歳で就任した若い大統領です。彼は旧ソ連が1957年10月に人類初の人工衛星、スプートニク1号を打ち上げ、米国が大きなショックを受けていたときに、1960年代末までに人類を月に送り込むと宣言し、それは1969年、ニクソン政権下、アポロ11号によって達成されました。ケネディ自身は1963年に暗殺されました。

3. 第40代 ロナルド・レーガン

「政府が我々の問題のための解決策なのではなく、政府が問題そのものなのだ。」（1981年）

これは「小さな政府」を掲げたレーガン氏の姿勢が鮮明に出た言葉として知られています。ウォーターゲート事件やベトナム戦争、イランでの米大使館占拠・人質事件など、米国の衰退を感じさせる厳しい七〇年代を経て大統領に就任したレーガン氏は、国民の創造性と民間企業の活力に国力復活の期待を掛けました。

4. 第44代 バラク・オバマ

「あなたが握った手を開けば、我々は手をさしのべる用意がある。」（2009年）

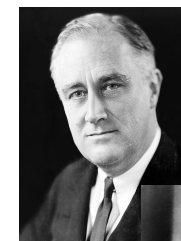
「我々は貧しい人々、偏見の被害者にとっての希望の源泉であらねばならない。」（2013年）

アフリカ系アメリカ人として初めて大統領に就任しました。この演説は、時には弱腰と批判を受けながらも、対話を重視した外交姿勢を象徴する言葉となりました。オバマ大統領の任期中にアメリカ合衆国の海外での評価は大幅に向上し、彼の大統領職は一般的に好意的に評価されています。彼は2009年にノーベル平和賞を受賞しました。

5. 第45代 ドナルド・トランプ

「この日から、『米国第一』になるのです」（2017年）

この言葉通りに、パリ協定など米国に不利と考えた国際的な取り組みから次々と離脱しました。国内の分裂は南北戦争と並べられています。



第46代 ジョー・バイデンへ

皆さんはそれぞれの演説をどのように感じたでしょうか。バイデン氏の演説はぜひ自分で調べてみましょう！

※バイデン氏の演説を聞いた委員の感想:

バイデン氏のアメリカに対する思いや、自身の大統領という責務についての意気込みが、深く表れていたと思います。